

# 「心身問題」についての一つの見方

土 屋 純 一

心身問題は近ごろ分析哲学においてよく論じられるけれども、正面切って物質の精神の関係を問うということは元來分析哲学の得意とするところだっただけではない。論理実証主義のなかでは心理学の科学としての意味づけが問題にされたが、カルナップの論（かれの論理実証主義以後の仕事も含めて）以來そう目立った提案があったとは見えない。また第二次大戦以後の著しい仕事となったライルの主著やヴィトゲンシュタインの遺作について言えば、かれらの考えでは心身問題は哲学の問題としては解消されるのであって、以後心にかかわる言葉づかいを常識のなかで細かく分析する方向を開いたのであった。しかるにその間いわゆる人工知能の急速な実現によって、「人間と機械」ないしは「心と機械」の異同の問題から、心身問題の見直しが必要になってきた。こうした事情のなかで一九六〇年代になってアイデンティティ・セオリー（以下「同一説」という）がよく話題に上るようになったのは、一つには定式のわかり易さがあることと、もう一つは私的・直接的な経験について語ることを有意味とみとめて同時にそれが自然主義的な世界観と両立するとして与って力があると思われる。

1  
同一説は一九五〇年代後半にU・T・ブレースによって提出され、J・J・C・スマートによって展開された。またこれとは独立にハーバート・ファイグルによっても主張された。以下ではこの同一説を検討することから出発して、心およびそれにかかわる諸概念の独自性とみえるものは、人に対する一つの見方の特徴にはかならず、実在に関する二

元論を支持するものではないが同時にわれわれの概念組織における二元性をみとめなければならないこと、しかしこの二元性は私的と公共的という二元性とは異ったもので、常識的な人間理解においてすでに心にかかわる諸概念は理論的なものとしてとらえられており、そのゆえに心身問題は形而上学の問題としてはあらわれないこと、をスケッチの形で述べてみたいと思う。

・ ファイゲルの同一説については、かなり以前のものであるが筆者による紹介と一、二の論点の提示がある(土屋1967)。また、スマートらの同一説の成立にかかわるオーストラリアの哲学界の事情については、論集 Presley 1967 の pp. xi-xiii (編者 C.F. Presley 執筆)が参考になる。

## 二

J・J・C・スマートの同一説はその有名な論文(Smart 1959)の表題の示すとおり、感覚は脳過程と同一であるという形で主張された。ここでつぎの二点に注意することが重要だと思われる。

(一)「同一性」(identity)の性格について。スマートはこれを必然的同一とせず、偶然的な、事実としての同一とみる。意味上の同一を要求しない。「脳過程」は「経験」の意味の一部ではない。

さらに、このとき同一と言われているものが個別者としての出来事の同一なのか、一般者としてのある種の脳の過程ないし状態と、ある種の内容の経験との同一なのか問題になる。大方の同一説論者は後の見方をとる。かれらの好んで引く例は水と $H_2O$ 、電光と空気中での放電、温度と分子運動の平均エネルギーの同一等々である。

(二) 同一説は物理主義の考えを維持しながら直接経験をのべる一人称の言明を有意味とするが、この種の言明の内容がまったく private なもので、本来公共的な観察をゆるす物的過程とは同一ではありえないとする反論がすぐ予想される。(たとえ脳過程でも徹視的な物理学上の存在でも「観察」の意味の取りようによっては観察可能と言える。)

そこでスマートは、直接経験の一人称報告にあらわれる語句は特に物的でもないがまた物的なものと両立しえないものでもなく、当面の論点——心的なものの物的なものへの還元は可能か？に關しては中立 (topic-neutral) あるいは“open”であると言う。従つて、大雑把に言つて

(1) 私には黄色いものが見えている

は脳過程の報告でもあつて同時にそれに対して何かある心的な特性を帰属させているわけではない、なぜなら(1)は(2)のように言いかえられるからである。

(2) 私がたとえはレモンのようなものを見ているとき生起しているのに似たことがいま生起している。

もちろんここで「レモンを見ている」についてはいくつもの条件が要するが、それらを備えた標準的な状況のもとである対象を原因として生ずる出来事としてのべ直されうる、ということになる。そしてそのような記述は経験的な発見によつてみだされうるであらうと想定されている。

このようにスマートは一人称の心的事象の記述をあたえるのに、その心的事象と相關する刺激と反応の典型的なものによるビヘイユアリズムの方法をもつてし、そのような記述の仕方は心身問題に対して言質をあたえないと考へた。ちやうど「太陽が西に沈む」と発言しても、天動説を復活したことにはならないようなものである。「論点に中立」な仕方での心的事象に意味づけがなされるということから、心的事象はそれに固有な、intrinsic な特性をもたないと考えられることもできるということが言えるので、これを物理的事象とアイデンティファイする道が開かれる。ここで理想的な神経生理学といったものが裏づけとして予想されているのであらう。

ブレースやスマートはまづ感覚について脳過程との同一を論じたが、D・M・アームストロングはこれをうけて、大掛りな形で同一説を展開して、すべての心的事象について同一説を可能にするような分析を行おうとした (cf. Armstrong 1968)。ただし心的事象の中立的な記述をあたえるとき、かれは刺激よりも反応の方に重点をおいたので、

心的状態を、ある範囲内の刺激 $S$ によってある範囲内の反応 $R$ を生み出すのに適した (apt for the production of  $R$ ) 状態とみた。この限りでは心的状態をふるまいへのデイスポジションと解釈したことにもなるが、デイヴィッド・ルイスの示唆 (cf. Lewis 1966) に従って、心的状態を有機体のふるまいにおいて原因としてはたらくものと規定する方向へ進んだ (cf. Armstrong 1973)。デイスポジションについては、たとえばガラスの「もろい」という性質はある程度強く打てばこわれるということと記述できるかもしれないが、これをガラスの組成上の特性とアイデンティファイすることも可能であろう。同様に考えると心的状態のデイスポジションな分析から、脳過程の物理—化学的特性による因果的説明へ進むことが可能だということになる。そこで現状ではそうした因果的説明がほとんどあたえられていないにもかかわらず、アームストロングは自分の同一説は因果説 (causal theory) だと見てよいと言う。心的諸概念の因果的分析が成功しても同一説が演繹されるわけではないが、少くとも後者を支持する有力な根拠になる。

・ ここで「黄色いもの」と書いたが、たとえば残像であってもよい。

## 三

前節ではスマートおよびアームストロングの叙述にもとづいて同一説の特徴をいくらかのべた。問題点の一つは心的事象についての言明の性格のとらえ方にあると思われる。それは果して「論点に中立」な書換えによってデイスポジションな、ないしは因果関係をふくむ複合体に直せるものであろうか。むしろ心的事象の言明はわれわれの概念組織のなかで独自の地位を示しているのではないか。

ある人たちは心についての語り方と物についての語り方を共にみとめているような概念組織を「常識」として、科学に対置する。そのときの科学の見方は、基本的には物理主義の線上にあると言えよう。たとえばスマートも同一説の提唱後数年してつぎのように言う (Smart 1967)。感覚報告の物理主義的分析をあたえることが必要なかどうかは

疑問である。感覚報告は常識の二元論のなかに根を下してしまっており、その意味では科学の組織のなかで説明をあたえうるような言明とは、その身分を異にする。心的事象としての感覚は、最終的には消去 (eliminate) されるべき存在、否むしる擬似存在であって、常識において心的事象が果してきた説明上のはたらかきは、脳過程を指示することによって一層よく成しとげられることになるであらう、というのである。このような立場の端的な表明はすでに P・K・ファイヤーベントによってもなされていたが、スマートはかれの見解への傾斜を表明している。

J・W・コーンマンはこのような立場を「消去的唯物論」(eliminative materialism)と呼んで整理し、「還元的唯物論」(reductive m.)と対比している (cf. Cornman 1971)。これらの用語の適否はともかくとして「消去的唯物論」をとる人びとはつぎのように論ずる。心的なものの物的事象への還元を主張する人びとが、そうした還元が成功したときもなおある種の物的事象についての言明が、心的事象についての言明でもあるとするのならば、それはおかしい。われわれの使う言明が何を記述しているかは、その言明の織り込まれている概念組織ないし、世界についての全体的な見方から独立には決まらない。たとえばフロギストンによって記述されていた現象が、酸化の理論のなかで記述されるようになったとすれば、それは「同じことが別の記述をうけるようになった」と言うよりは、古い枠組と共にかつての擬似存在が消去されたと言うべきである。同様に、常識のなかの心的事象に関する言明が「論点に関して中立」だとする立場は、少くともわれわれの将来の認識においては斥けられねばならない、と説かれている。

このような議論は、科学の発展というそれ自体は経験的・歴史的なことがらに対して、アプリアリな想定を下しているのではないかと疑われるので、その点でも難点があるが、これについては今は論じないことにする。

#### 四

第二・三節においてわれわれは同一説における心的事象に関する言明の位置づけに焦点を合せて見てきたのである

が、同一説においては、つぎのこの意味が十分考えられないと思われる。それは、われわれが心的事象を、つねにはないにしても大抵の場合は、ある主体・ある人に帰属せしめるという点である。この事実の軽視のため、同一説は心的事象をまづ直接的・私的なものとしてとらえ、これを想定される脳過程と同定することによって、その間にこれら二通りの事象が帰属せしめられているもの、つまり人についての指示を省略してしまいう形をとっている。ここでいう人とは、P・F・ストローソンのいうパーソン (person) に倣ったものであって、その心的状態について語ることも、そのふるまいについて語ることも、またその脳過程について語ることも、いずれも意味をなしうるような存在である。これは、心的事象を精神とか意識とか自我とかに帰属させて、かつ脳過程を身体に帰属させるという伝統的な二元論よりも、一層常識に近いものと言える。

人についてその心的事象について語ることが、その物的諸過程について語ること並んで可能であるということは、大まかに言って、一つのものに対して少くとも二通りの見方・語り方が可能であることを示唆する。ここで二通りの見方の別を立てるためには、それらが論理的に言って区別徴表をもつことが当然期待され、この点については心的事象についてのある種の言明が示す特性を心的事象に特有な「志向性」(intentionality)の徴表として取出そうとする試みのあることは、よく知られている通りである。(代表的な仕事はR・M・チザルムにみられる。たとえばChisholm 1962を参照。)だが当面の論点に関しては、心的事象についての言明はすべて外延的言語に対応させることができるものかどうか?という問に対して直ちに決着をつけるには及ばない。志向性を特徴とすると行ってよいような一聯の語り方がある、ということを確認するので十分であり、またこの暫定的判断は、志向的文脈(代表的には belief sentence)の意味論の今日までの実績に照らして、許されるのではなからうか。つまり、少くともある種の心的事象を人に帰属せしめる語り方は、物について語る、ないしは人における物的事象について語るのとは、意味論的に言って異った様子を呈していると見ておく。

志向的文脈のなかで最も目立つものはラッスルの言った propositional attitude である。<sup>\*</sup>Propositional attitude は心的状態の記述にあらわれると同時に、また人のふるまい、とりわけ行為を理解し説明しようとするときに決定的な役割を果たすことは、信念 (考え, belief) と欲求 (desire) の二つだけを取ってみてもわかる。以下では人に心的事象を帰属させることの意義を、もっぱらこのような propositional attitude に絞って考え、しかもこれを人の行為、特に意図的行為の場面においてみることによって、物的事象についての語り方との性格のちがいを取出すことを試みたい。行為の理解と説明とは、自然科学での説明方式とは根本的に異ったものであるとする主張は、よく聞くとところである。われわれは前者の特徴の一つを、その人 (主体) に帰属される心的事象への指示を必然的にふくむことに求めたい。ただしそのような心的事象がいつでもその人に意識されている、あるいは気づかれているとは限らない。(以下志向的状态とか内的状態という言い方で考えているときも同様である。) またそうした心的事象を、その人のふるまいとそのディスポジションに還元することでは不十分である。その主な理由は大いに実際的なものであって、たとえば「*p*という信念」を音声や身体運動によって explicit な形で定義することはできない、という点である。定義を試みるとすれば当のふるまいのあらわれた状況への指示をも含むような implicit なものとならざるをえまいが、状況特定するためには、他の志向的諸概念に言及せざるをえなくなるからであって、これはたとえば「さがす」という一語を取ってみてもあきらかである。ふるまいの上からでは定義できないか、さもなければ「見つかるだろうと思っている」というような他の志向的概念を入れて定義しようとするほかないからである。

ここでは詳しい議論ははぶくが、少くともある種の心的事象については、これにふるまいとの関聯において意味づけを行おうとすれば、心的なものへの指示なしにはその状況を特定することができないのであって、「志向的なものの物的なものへの還元はできない」という命題については、上のようなことを含めて理解できると思う。そこでわれわれは還元主義に反対するけれども、出発点においては十分に行動主義的である。<sup>\*</sup>

かつて心理学における行動主義の唱導者の一人B・F・スキナーは、(かれが)『内的状態(を指定すること)』に反対するのは、それが存在しないということではなくて、機能的分析とは関わりがないということである』(Skinner 1953, p. 35)と書いたが、意図的行為のような高次の活動については、それを内的状態への指示をふくむものとして再構成することがむしろ機能的分析と言うべきものをあたえることになるのではないか。

・この論説では志向的文脈の意味論に関する叙述は省いた。ラッスルについて言えば、周知のようにかれは *The Problems of Philosophy* (1912) において信念文の構造を考え (multiple-relation theory とよばれる) *The Philosophy of Logical Atomism* (1918) でこれを訂正したが、一般的・積極的な理論を提出することはできなかった。そして *The Analysis of Mind* (1921) や *An Inquiry into Meaning and Truth* (1940) では信念についての意味論的分析はやめて、行動主義的な見方にうつっている。これは意味論の立場から言えはなはだ物足りないが、この点については今日でもなお決定的なものはないわけで、信念文の構造の問題について未決のまま、一方で信念その他の心的状態をふるまいの説明において指定することは一応許されるのではないかと思う。もちろん、シュンカテゴレマティクな成分の取り出しをやめてすべてを動詞ないし述語の中味に含ませてしまう政策に危険な面があることは(たとえば因果関係の分析において)、注意しなければならぬ。

・志向的文脈の問題については不十分ながら、土屋1966その他において扱ってきた。

## 五

人の或る種のふるまいの理解についてはその心的状態への指示が必要だとし、その還元不可能性を言うことによって、物と心との二元論にコミットしたことになるであらうか。さきにもふれたように、われわれはこれを実在の二元性よりも、一つのものに対する複数の見方の相互還元の可能性を示しているものと解したのである。この点の理解のためには、人ばかりでなく、いわゆる人工知能について同様の解釈ができるかどうかを考えてみることに有益で、同時にこれはわれわれの心的事象とよんできたものの性格をはっきりさせることと思う。

最近D・C・デネットは、志向的諸概念を帰属せしめることによって人の、あるいは計算機の、ふるまいを説明し



予測するようなシステム（かれはこれを志向的システムとよぶ）を導入するにあたって、チェスを指す計算機を実例として取上げ、われわれはこれについてつぎの三通りの見方をとりうる、と論じた（cf. Dennett 1971）。

第一の見方は狭義の機能的な見方、あるいは目的による理解であって、具体的にはその設計を理解することである。これによってふつう、機械を構成している諸部分（その配列はブロック・ダイアグラムによってあたえられる）の機能を理解することによって、全体としての機械がどんなはたらきをするかを説明し、また大体の予測をつけることができる。この見方は当のシステムの物理的・化学的構成や内的状態への指示を含まない。たとえば電磁気学の法則を知らなくてもステレオセットを鳴らすことはできるし、また組立てることも多分できるようなものである。

第二の見方は物理的なものである。システムのはたらきについて自然法則の知識をつかって説明し予測する見方がある。これは電子計算機のようなきわめて複雑なメカニズムについては実際には困難であるが、原理的にはこれを一層簡単な要素に分解し、その物理的理解にもとづいてシステム全体についての理解もできると考えられる。

だがチェスを指す計算機に対して、上の二つの見方をとりつつ人がこれに対局することは、たとえかれがその機械の設計者であつたとしても困難である。むしろこのときも他人と対局するときのように、チェスの規則の枠のなかで、相手の手を「読み」つつ、最善の応手をするほかはないであろう。ここでいう規則には、それを破ればもはやチェスではなくなるような文字どおりの規則と、「定石」にあたるオブショナールな規則との二つの段階をふくめて考えるものとしよう。これはシステムとしてのチェス指し機械を、合理的ふるまいをするものとみることである。あるものを rational とみることは、それがある情報をもっていること、ある目標をめざしていること、そしてこの両者にもとづき、規則にかなった最善の手を選んでくるであろうという想定のもとに、そのふるまいを予測し、またなぜそのふるまいがあらわれたかを説明することができるということである。

さて、デネットの言うように、ここから一步を進めると、『この計算機がもっている情報をその信念 (beliefs) とよ

び、その目標と副次的な目標とをその欲求 (desires) とよぶことになる。』(op. cit. p. 90)

ギルバート・ハーマンは、志向的システムを参照して心的なものを意味づけることは、心的状態をもって有機体の機能上の状態 (functional state) とみることになる、と言う。『欲求、信念、推理を理解することとは、欲求、信念、推理が人間心理においてどのように機能するかを理解することである。』(cf. Harman 1973, p. 45) 但しここでの「機能的」という語は、デネットのあげた三つの見方に当てていえば、むしろ第三の見方において使われていると言ふべきであらう。

計算機についてその内的状態ないし論理上の状態と、(物的)構造上の、ないし素材上の状態とを区別することによって、いわゆる人間機械論をめぐるいくつかの疑問点が解消し、そのアナロジーが心身問題にもきくのではないかということは、かなり以前からヒラリー・パトナムによって詳しく論じられている (cf. Putnam 1960)。かれが論じたのは実際の電子計算機ではなく、論理機械の一種であるテュリング・マシーンであり、これと人間の心との間のアナロジーがどの程度に成立つかは問題になるが、この点はしばらくおくとしよう。重要なのは、計算機械について、入力・出力と論理上の状態との関係、また論理上の状態相互の関係は、そのような状態がいかなる物理的記述をうけるか、いかなる素材・物質的手段によって実現されるかということとは独立に意味づけられるということである。真空管の代りにトランジスタやダイオードを使って同じ論理上の状態を実現できるだろう。

これとまったく同様に、人の心的状態はかれの機能上の状態として、その物理・化学的記述ないしは神経生理学的記述とは独立に意味があたえられると考えることができる。実はこのような区別はアリストテレス以来のものである。「怒り」は自然学的には、あるいは素材による説明の立場では心臓の周りの血液の沸騰であるが、論理的には、あるいは形相による説明としては、仕返しをしようとする欲求、ということになる (cf. *De Anima* 403a29sq.). 志向的システムにおける機能上の状態は直接観察をゆるすというよりも、一方ではそれと刺戟あるいは状況との結びつき

方が、他方では当の有機体のふるまいについてその演ずる役割が、それぞれ部分的に確かめうるような仮設である。

ここで上の見方の角度から同一説についてもう一度反省してみよう。同一説は機能上の状態が物理—化学理論によって記述される状態と一致すべきことを主張しているものと解されるのであるが、物的状態として相異なる二つ以上のシステム（人間と計算機でもよい）が機能上同一の状態を実現しているとすれば、同一説と、心的事象に対する機能主義の見方とは両立しないことになる。たとえばハーマンはつぎのように論ずる。ある人の脳の一部が痛みの中核であることが確定したとしてみる。さらに、この脳の一部をそれと同じはたらきをする人工物でおきかえることができるか、つまり同じ入力を受け同じ出力を出すようなものとする。このとき仮定によって、その人は今までと同じ痛みを感ずるであろう。だがこの人工物において生じている物的過程は脳における過程と同じだとは限らない（Harman 1973, pp. 38f.）。

志向的システムは、以上でのべたように、現実の人の心も計算機も共にそのモデルでありうるような抽象性をもっている。そしてこの抽象性のゆえに、一元論か二元論かという従来の問い方は、志向的なものの理解については決定的な意義をもたないのである。

・ テュリング・マシーンは決定論的である。なぜならある時点におけるその作用は、機械の内的状態および入力（機械の "state" するタイプの一駒に記入されている記号）によって一義的に定まるからである。しかしわれわれは人間の心については、ある心的状態に引続いて起る状態が必然的に定まるとは見えていないであろう。この点で心はむしろ非決定論的オートマトンに近いかも知れない。ここでは状態から状態への（または入力から出力への）移行は、一義的に定まるのでなくたかだかある確率をもってあたえられる。

## 六

前節で、人に帰属されるものとして心的事象が語られるということは、それが意識の内容であるというよりも、人の物的記述のみからは推論できぬものとして、かれのふるまいについての理解を可能にすべく措定されているという

ことだと考えてみた。そしてこれに対する意味づけはその人を一つの志向的システムとして見、その全体への指示をふくむことによってなされると想定した。このことはすでに常識のなかに組込まれているが、もう少し抽象的な段階を考えるため決定理論 (decision theory) を例にとろう。

決定理論においては、賭のような選択行動はつぎの二つの心理的要素によって決まるとみられている。すなわち(A) 選択結果のそれぞれに対して行為者があたえる相対的な価値、期待される効用と(B) それぞれの選択肢について、結果に対してあたえられる確率または信念の度合 (degree of belief) とである。したがってかれの選択行動と(A)とから(B)を、また選択と(B)とから(A)を、それぞれ推論することができる。ところで、かれの選択のバターンだけがあたえられたとき、(A)と(B)の両方を計算することができるか？これに肯定的に答えるものが主観説確率論 (subjective theory of probability) である。簡単に言えば決定理論は確率と効用から行為の期待値を計算するものであったが、主観説確率論は選択肢のあいだで行為者のおこなう選択 (preference, choice) を証拠として出発するもので、この選択がある規則性をもっておこなわれるとき確率と価値のオーダーが定まるとみるものである。適当な行為がみつければ行為者の信念の度合＝主観的確率をかれの主観的効用から区別して取出すこともできる。(行為者が確率を客観的確率または相対頻度によってあたえるとみれば話は簡単であるがこれでは選択行為に先立って確率を仮定したことになってしまう。)

この考え方では、ある特定の選択を説明するにはその行為の確率の値ぶみとその行為のもつ (相対的) 価値の割付けとによるのであって、行為者の信念や態度に対する「洞察」によるのではない。ある選択は他の諸選択の観察によってサポートするほかはない。主観的確率と価値は選択を説明するための理論的構成物なのだが、だからといってそれらを基本的なものとして選択が演繹されるという形をとっているのではない。

ここでつぎの二点が注意されてよいであろう。第一は決定理論は、選択が合理的になされるということを前提とし

ていることである。たとえばAよりBが好まれ、BよりCが好まれるならば、AよりCが好まれるのでなければならぬ（選好の推移性）。このようなフォーマルな諸性質を公理系に組むことができることも周知の事実である。しかしそのような公理系はそのままでは心理学理論にはあらわれないであろう。現実のふるまいに適用されるとき、人はそうした規範を近似的にみたす選択者だと仮定されているのである。つまりわれわれが人の行為を理解するときには、その志向的システムが合理的（理性的）という性格をもつことを言わばアプリアリに前提しなければならぬのであって、そのため人のふるまいの説明は、ある種の動物のふるまいの説明とは違ったものにならざるをえないのである。

第二の点は、志向的システムの全体論的（holistic）性格である。人の信念と欲求（価値序列）を指定することによってその行動を予測することは、基本的なものへの還元による説明とは異ったものであると言ったが、このことは現実適用される場合一層はつきりしてくる。人のふるまいを精確に予測しようとすればするほど、われわれはかれの考えや欲求の全システムを知らねばならず、またシステム全体の連関を精確に知るには、別の志向的なものを指示しなくてはならない。たとえばある人の発言によってかれの信念を確めるさいには、状況によってはかれが嘘を言っているのではないとか芝居をしているのではないということ特定する必要があるが、ここで嘘を言うとか芝居をするというのは明らかに志向的なものである。志向的システムについては決定論的法則がありえないことは、なにも自由意志の存在を証拠立てるものではなくて、その全体論的性格によって<sup>＊</sup>。

＊ Epistemic/Doxastic logic が心理学理論ではない理由も同様のことだと考えられる。

＊ この節の叙述に関し、Davidson 1974 に負う所が大きい。

## 七

ところでわれわれの考え方が、心的なものの意味づけは人の広義におけるふるまいに関する“理論”のなかであた

えられるとするものだとなれば、これは物とも心ともちがう「意味」の世界を独立させて考えていることにはならぬであろうか。この疑問は、志向的システムと言語との本質的な結びつきを考察することによって答えられるであろう。

経験的な問題としての言語と志向的なものとの関係についてはここで言うまでもないであろう。ウィルフリド・セラーズは抽象的理論と経験的確認との言わば中間の段階において、志向的状態の構造とセンテンスの構造のあいだに類似があり、かつ志向的システムはひとつの言語であるという仮設をおいた (cf. Sellars 1956, 1968)。

この類似関係についてシンタクティカルな面とセマンティカルな面とを分けて考えることができる。ここでは後者を主として考えよう。セラーズは心的状態の志向性を文の表現的性格 (representativeness or aboutness) によって理解しようとする。大まかな例をあげれば、私が富士山について語るのと同じ意味で、富士山について、考えると言えるし、また「富士山は火山だ」という真なる文が富士山は火山であることを表わすのと同じ意味で、富士山は火山だという考えが、富士山は火山であることを (正しく) 表わしている、と言ってかまわない。文についても考えについても共に真・偽を語りうるのである。

セラーズの考えに従えば志向的状态が一つの言語システムをなすと考えることができるわけであって、これを the language of thought と呼んでもいい。するとたとえば信念はこのシステムの中に在る文が或る位置を占めることになる。一つのポイントはこの「考えの言語」の文の例が心的状態の例であると見なすことである。「かという考え」はタイプとしての文のトークンの一つである。現実の文がそれをタイプとしてみたときは、当の文に応ずるトークンまたはインスクリプションとは次元の異なるもので、またタイプとして同一の文に相異なるトークンが対応しうることは言うまでもない。

ではこの「考えの言語」の「文」の意味は、どのようにしてあたえられるのであろうか。このときその考えの表現

であるような文の意味がそれである、と答えるのは、当を得ないであろう。なぜなら文の意味 (meaning) としてわれわれは話し手の考え・意図の表現ということとその一つの次元として数えねばならず、これは文のもう一つの機能である指示 (reference) の次元とは区別されるべきであるから。セラーズは考えの「意味」は考えを言語ゲームのなかにおいてみたときの心的状態の役割 (role) であるとした。ハーマンはこれをうけて、セラーズの論は心的状態または考えについての theory of meaning をあたえたものと解釈した (cf. Harman 1970)。

このように志向的なものを一種の理論上の構成物として扱う見方に対する、誰でも思いつく反論は、つぎのようなものである。なるほど他人の心については、かれのふるまいとの関聯においてその内容を指定するとみるにしても、自分の心の内容についてわれわれはまったく別の近づき方をしているのであって、それは内観的・直接的な知り方である。そしてこの知り方は本質的に訂正不可能性 (incorrigibility) という認識論上の特性をもっており、これは物的事象や他人のふるまいの理解に対する場合にはみとめられないことだという。この見方は、心的事象についての言明は一人称と三人称とでは、文法上似た形式をもっている、その間に基本的な非対称性 (asymmetry) があるという認識から出ていると思われる。

かつてバトナムはこの問題についてつぎのように考えた (Putnam 1960)。たとえば自分の痛みに関する言明の訂正不可能性が厄介な問題とされてきたが、テュリング・マシン (以下 TM と記す) との類比を考えれば問題はなくなるという。TM がある一つの内的 (論理的) 状態 A にあるとき「私は状態 A にある」という文を印字するような機械表 (machine table) をあたえることができる。このとき「機械は状態 A にあることを確めた」と「ジョーンズは痛みを感じている」ということを知っている」との間にアナロジーが成立つ。ところで TM の場合「私は状態 A にある」と印字するためにはいかなる状態を経ているかと言えば、そのようなものは何もない。したがって「いかにして TM は状態 A にあることを知っているのか」と問うとすれば、「状態 A にあることによって」というトリヴィアルな答しかない。

そのようにジョーンズの言明もまづかれが自分の内的状態を内観しこれを報告したと考えるには及ばない。いかにしてジョーンズが自分の痛みを知ったかと問うことはあまり意味がないのはTMの場合と同じである。

さきに第五節でふれたようにTMは抽象的なものであってその状態が物理的にどういうものであるかは決っていない。しかも仮に物質的にTMが実現されたとしてもTMが自分の物的・構造的状態を確める手段をもたないのはちょうど人がある時点において自分の虫垂がどんな状態にあるかを確める方途がないのと同様である。もちろんこのTMに自己の構造上の状態をモニターするような装置を付けてこれをテープ上の記号として打出すようなものを作ることはできる。このときにはたとえは「この機械はいかにしてその真空管が故障していると確めたか？」と問うことは十分意味がある。なぜならこのときは誤りの可能性が十分あるからである。物理的反応は必ずしも正確に機械の言語に翻訳されるとは限らない。これは人の場合については自分の身体の状態についての判断（たとえは「熱がある」）であって、これは単なる言いまちがいは異なる実質的な誤りの可能性をいつも含んでいる。これに反してTMが状態Aにないときに印字装置の事故によってテープ上に「私は状態Aにある」と打出すとすれば、これは計算の誤りではなく、言い違えに類するものである。

パトナムはあらまし右のように論じて、自分の心的状態に関する訂正不可能な報告にあたるものをTMについて類比的に考えることができることを、論理上の状態と物的状態との区別を基礎にして明かにした。TMは自己の論理上の状態を確認する必要があるからこそ、その論理上の状態を誤って同定することはないのである。

だが自分の内的状態についての訂正不可能・不可謬の報告も報告であって、人との類比が成立つほどの機械に要求されるような内的状態を印字して打出す報告能力はきわめて高度のものになるだろう。同様のことを人について考えれば、それは言語を入れて考えなくてはならないことに気づく。われわれが自然言語によって自分の心的状態について報告をなすときいかなる生理的機構がはたらいているのかは未知のことに属する。セラーズは上述のような、考え



を理論上の構成と扱う立場からも内観報告を言語学習に関する一つの思考実験にもとづいて再構成することが可能であることを論じた。すでに述べたように考えはふるまいの説明のため理論上の内的存在として措定されたものであって、直接経験の報告の対象ではなかった。ここで逆に学習によってふるまいの観察と推論なしに内観報告のディスプレイが形成されうると想定するのである。普通の考え方では「私は心的状態Aにある」という一人称言明の証拠は、当のA以外にない。セラーズの説は、甲のふるまいにもとづいて「甲は心的状態Aにある」と仮定できる状況においては、同じ証拠によって、甲が「私は状態Aにある」と発言するディスプレイが獲得されるという段階を中間において説明しようとする点に特徴がある。しかしセラーズの説については別の機会にも扱ったので、ここではこれ以上述べないことにする (cf. 土屋1972)。

以上においてわれわれが「心身問題」に対して取った見方は、精神と物質または身体とを、二元的に並列してその間の関係を問うものではなく、むしろそうした問題が生じないような次元にあるものとしての心という概念を、常識においても、人の行動に関する理論においても用いているのではないか、ということであった。したがって存在論上の物質一元論はわれわれの見方と矛盾するものでなく、またその前提でも帰結でもない。

## 文 献

- Armstrong, D.M. 1968. *A Materialist Theory of Mind*. London: Routledge & Kegan Paul.
- , 1973. 'Epistemological Foundations for a Materialist Theory of the Mind,' *Philosophy of Science* 40, 178-93.
- Chisholm, R.M. 1967. s.v. 'Intentionality' in the *Encyclopedia of Philosophy* (New York: Macmillan), vol. 4, 201-4.
- Comman, J.W. 1971. *Materialism and Sensations*. New Haven: Yale Univ. Press.

- Davidson, Donald. 1974. 'Psychology as Philosophy', Brown, S.C. ed. *Philosophy of Psychology* (London: Macmillan), 41-52.
- Dennett, D.C. 1971. 'Intentional Systems', *Journal of Philosophy* 68, 87-106.
- Harman, Gilbert. 1970. 'Sellers' Semantics', *Philosophical Review* 79, 401-19.
- , 1973. *Thought*. Princeton: Princeton Univ. Press.
- Lewis, David. 1996. 'An Argument for the Identity Theory', *Journal of Philosophy* 63, 17-25.
- Presley, C.F. 1967. Introduction to *The Identity Theory of Mind* (ed. by Presley). St. Lucia: Univ. of Queensland Press.
- Putnam, Hilary. 1960. 'Minds and Machines', Hook, Sidney. ed. *Dimensions of Mind* (New York: New York Univ. Press), 148-79. (Repr. Collier Books, 1961)
- Sellers, Wilfrid. 1956. 'Empiricism and the Philosophy of Mind', *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. 1, 253-329. Repr. in *Science, Perception and Reality* (London: Routledge & Kegan Paul, 1963).
- , 1968. *Science and Metaphysics*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Skinner, B.F. 1953. *Science and Human Behavior*. New York: The Free Press.
- Smart, J.J.C. 1959. 'Sensations and Brain Processes', *Philosophical Review* 68, 141-56.
- , 1967. 'Comments on the Papers', Presley, C.F. ed. *The Identity Theory of Mind* (Univ. of Queensland Press), 84-93.
- 土屋純一, 1966. '意味と志向性' 『哲学研究』(京都哲学会刊) 43, 461-71.
- , 1967. '同一説について' 『金沢大学法文学部論集』哲学篇14, 73-82.
- , 1972. '考えと言語—セラーズの説を中心に—' 『金沢大学法文学部論集』哲学篇19, 1-18.
- 筆者後記——以上の論説は、当初、関西哲学会昭和五十年年度課題研究「心身問題」のために用意されたもので、その一部は同学会大会(昭和五十年十月十七日、於愛媛大学)において口頭で発表された。シンポジウムにおいて有益な批判と助言をあたえられた同学会会員各位に謝意を表したい。このたびこの論集に掲載するに当って、同学会のさい時間の制限のため述べえなかった部分を補った。右のような事情のため、筆者がすでに発表した諸論文と、部分的に重複するところがあることをお断りしておく。